

令和7年度 学力向上指導改善プラン

学校教育目標 人との豊かなつながりの中で、一人一人の自立と社会参加を目指し、たくましく生きる力を育成する

目指す子どもの姿 『笑顔いっぱい ひまわりのみんな』
《とまどちと仲よく支え合う子【共生】》《明るく、元気な子【挑戦】》《自己実現に向けて努力する子【自敬】》

変容を目指す資質・能力 a 知識及び技能 b 思考力、判断力、表現力等 c 学びに向かう力、人間性等 d 情報活用能力
e 課題解決能力 f 学び続ける姿勢 g コミュニケーション能力

三田市立ひまわり特別支援学校
学校長 山口 貴久
研究主体【課題を明確にした授業の実践】

前年度			継続性	4月(※全国学力・学習状況調査の結果などを受けて年度途中で変更する場合は削除、追記部分を赤字で修正)			2~3月 年度末評価		
学力向上に向けた重点的な目標	年度末評価 (前年度の成果と次年度に向けた課題等)	評価		学力向上に向けた重点的な目標 (変容を目指す資質・能力)	成果となる目標 (指標となる数値等)	具体的な行動目標 (成果目標達成のための具体的な手立て等)	教員評価	(今年度の成果と来年度に向けた課題等)	評価
【教育課程】 3つの観点を踏まえた教科等を意識したカリキュラムを構築し、個々に応じた指導を行う。	「定型発達」から「摂食」「手指」など、児童生徒の実態把握に向けた発達の研修会を持ち、個に応じた指導に活用することができた。また、教科指導の必要性や自立活動における目標と評価のあり方、教科と自立活動の違い、などの研修を踏まえて、教育課程の編成に基づいた学習指導を一定進めることができた。 個別の指導計画においては、より一層、児童の実態を正確に把握しつつ、1年後の姿をイメージした目標立てと指導を進めていかなければならない。	B	➡	【教育課程】 3つの観点を踏まえた教科等を意識したカリキュラムを構築し、個々に応じた指導を行う。(a,b,c)	個別の指導計画を作成し、自立活動と教科の関連性を意識した指導を行う。	定型発達の理解のもとで、個々の障害特性を知り、個別の指導計画を充実させる。作成した指導計画に基づき、指導と評価を行う。	3	国語、算数(数学)の新たな評価基準作成に向けて、自立活動と教科指導の研修をした。Sスケールと学習指導要領各教科等編解説書をもとに、現在の発達段階を理解し、系統立てた自立活動の学習や各教科の学習について考えた。しかし、重点目標にある「3つの観点を踏まえた教科等を意識したカリキュラム構築」までは至っていない。来年度は、神戸女子大学上野先生を招聘した研修を2回持つとともに、チーム担任制で教科指導を進めていき、R9年度からの国語・算数(数学)の観点別評価が実施できるよう研修を進めていく。	B
【健康の保持】 個々の児童生徒の摂食状況を保護者や関係各機関と情報共有しながらアセスメントすることで、個々の課題を明確にし、具体的な目標を設定する。	学部の全教師で、事前に全児童生徒の摂食方法を確認した上で、一人一人の児童生徒の摂食指導には、複数の教師で行った。摂食指導の研修で知識を深めながら児童生徒の実態に応じた指導を共通理解することで、チームとしてより適切な指導方法を探ることができた。 また、給食の誤配膳がないように食形態等を明記したプレートを用意し、複数の教師で確認する体制に改善した。	A	➡	【健康の保持】 個々の児童生徒の摂食状況を保護者や療法士と共有し、詳細にアセスメントした上で、指導の方向性を見出し、具体的な長期目標を掲げ指導する。(e.g)	摂食に関わる教職員が、口腔マッサージを含む摂食の指導力を向上させる。 各自それぞれの課題に応じたからだの学習を充実させる一外部講師との連携	全教職員対象に口腔マッサージや摂食指導の研修を充実させるとともに、給食参観などを通して保護者と摂食状況を確認して適切な指導に当たる。	3	各学部の児童生徒の摂食指導を、当該学部の教師全員で行うことで、実践を通して摂食指導の力を高めていった。 保護者とは、給食参観だけでなく、気になる状況や摂食方法について連絡を密にした。 食形態の変更が生じたときは、言語聴覚士などの助言を受けながら、保護者の了解をへて変更するなど、個々の児童生徒に適した指導に当たった。 摂食の量について摂取量調査を行い、保護者に結果を報告することで、主治医の指導の参考としている。	B
【健康の保持】 医療的ケアに関する研修を充実させるとともに、全教職員が個々の児童生徒の状態を共有する。	今年度も、個々の児童生徒の医療的ケアについて、年度当初に教職員で確認するとともに、通常の学校生活と異なる場合は、その都度、作成した医療的ケアの計画書をもとに教育活動を行った。また、事後には看護職員と医療的ケアの計画について振り返る機会を持った。 ヒヤリハット事案については、報告書の改善や働きかけなどで、全教職員にヒヤリハットの報告が更に定着した。	A	➡	【健康の保持】 個々の児童生徒の医療的ケアの必要性を理解し、教職員と看護職員が連携を取り、医療的ケアに関する認識を深める。必要に応じて事業所等関係諸機関との連携をとる。(d,e)	医療的ケアについての知識理解を深め、適切かつ確実な医療的ケアができるように看護部と連携する。 児童生徒の医療的ケアの認識を共有することで、関係諸機関との連携を強化することができる。	医療的ケアサポート会議を定期的に行い、看護職員と教員との共通理解を図る。 行事等は、医療的ケアの計画書を基に、看護職員と教員が綿密に打ち合わせを行った上で実施する。	3	個々の児童生徒の医療的ケアについて、年度当初に教職員で確認するとともに、通常の学校生活と異なる場合は、その都度、医療的ケアの計画書を作成し、看護職員と当該教師で事前に確認した上で教育活動を行った。また、事後には看護職員と医療的ケアの計画について振り返る機会を持った。校外学習等では、事前に見学を行い、看護職員と教職員が必要な対応について研修した。 ヒヤリハット事案については、報告書の改善や働きかけなどで、全教職員にヒヤリハットの報告が更に定着した。	B
【進路】 卒業後の生活を見据えて、個々の児童生徒につけるべき力を検討する。 高等部卒業生の追指導を充実させる。	地域社会共生フェスティバルを昨年に続き対面で開催することができた。各事業所、福祉、労働機関等と連携して開催することで、児童生徒及び保護者が直接情報を得る機会となること、教職員の将来を見通した進路指導、就労に向けた指導の充実への一助となった。 保護者対象の進路研修会では、卒業生の保護者から話を聞き、本人や家族の卒業後の生活の変化を見据えながら進路を考える大切さについて学び合う機会となった。また、教職員対象の研修会では、三田市内の事業所長から卒業後の生活や福祉について話を聞き、進路指導に活かすことができた。	A	➡	【進路】 小学部在学中から学校卒業後の生活をイメージし、それぞれの発達段階で児童生徒につけるべき力を検討する。 高等部卒業生の追指導を充実させる。(c,e,f)	進路の情報を教職員が理解し、それを保護者と共有する。 授業研究(一人一授業)の中で、学習内容、つきたい力が将来の姿に結びつくのかという視点で事後研修を行う。	地域社会共生フェスティバルや進路研修を行い、事業所の特徴や運営方針などを理解するとともに、積極的に新規福祉事業所の開拓を行う。また高等部卒業生の追指導を行い情報の共有を行う。	4	地域社会共生フェスティバルを開催し、12の事業所の説明を聞く場を設けたことで、保護者や児童生徒だけでなく職員も卒業後の進路イメージを具体化する機会とすることができた。新しく参加してくれた事業所とも、その後のつながりを作るきっかけとすることができた。また保護者研修会では、保護者同士が進路に関する情報を共有する中で、新しく知り得たことやさらに考えていくべきことを認識することができたよう良い研修となった。教職員研修会では、夏季事業所訪問研修を行い、事業所の様子を直接見たり、話を聞いたりして、児童生徒の指導に生かす情報を得ることができた。	A
【危機管理】 安全確保に向けた緊急対応訓練の実施と具体的なシミュレーションを行う。	火災や地震等の場面を想定した年2回の避難訓練に加え、地震についての防災教育を行った。また、心肺蘇生法の研修を年1回、児童生徒の体調急変を想定したシミュレーション訓練を各学部で年3回を行った。また、新たに不審者対応の研修もを行い、緊急時の対応について共通理解を深めた。 医療的ケア等の物品は、今年度も学期末に持ち帰り、必要に応じて交換するなど、保護者と担任が確認することで共通認識した。	A	➡	【危機管理】 学部間で連携を取り、緊急時対応における体制づくりを確立し、定期的にシミュレーション訓練を行う。 (a,b,e) 併接校である富士小学校・富士中学校との連携	災害時や不審者侵入、体調急変時の救急対応ができる力を身につける。 併接校である富士小学校・富士中学校と合同で避難訓練し、命を守る行動についての理解を深める。	災害時の対応訓練や心肺蘇生法の訓練、緊急時を設定したシミュレーション訓練を行うなど、あらゆる場面で対応できる力を身に着ける。 災害時や緊急時のマニュアルを定期的に見直すとともに、必要備品等を整備する。	4	4月当初に、各児童生徒の個別の緊急対応のマニュアルを確認し、月1回、内容の確認と手直しを行った。 児童生徒の体調急変を想定したシミュレーションを、各校区で学期に1回、職員全員で実施した。また、各学部でもシミュレーション訓練を行った。 避難訓練では、突然の災害を想定して、予告なしの訓練を実施し、その後の振り返りで問題点の改善を検討した。 次年度に向けて危機管理のマニュアルを全面改訂した。	B
【社会参加】 卒業後の生活を具体的にイメージし、各学部間で将来像の共有を図り、系統的なキャリア教育を推進する。	キャリア教育の校内研修を今年も継続して行った。今年度は、各学部毎に、子どもの課題を達成するために必要な項目について、「基礎的・汎用的能力」の観点から考え意見交換した。今取り組んでいる学びが卒業後の生きる力にどうつながるのかを考え、日常的に話し合うことが少ずつ増えてきたことは、成果としてあげられる。今後も、ライフキャリアの視点から個別の指導計画の見直しを行い、指導の充実を図ってきたい。	B	➡	【社会参加】 卒業後の生活を具体的にイメージし、各学部間で将来像の共有を図り、系統的なキャリア教育を推進する。(d,e,g)	高等部卒業後を見据え、個別の指導計画の重点目標の見直しを図る。	キャリア教育全体計画から、個々のキャリア教育の計画を作成し、個別の指導計画に反映させる。	3	教職員全体研修としてキャリア教育研修を行った。各学部1名の児童生徒を抽出し、現在の指導をキャリアの視点から見直し、今後の指導に役立てていく。検討内容を絞り切れない部分もあったが、キャリアの4観点を意識した指導をしていくことの重要性を共通理解できた。卒業後の生きる力につなげていくために、現状の学びを捉え返していきながら、より具体的な指導方針を立てていくことをこれからも意識していく必要がある。	B

○「教員評価」は教員対象に実施した自己点検調査結果(0~4の5段階評価)の平均値
○「評価」は年間の取組みについて、4段階で評価
A・・・十分に達成 B・・・おおよそ達成
C・・・達成が不十分 D・・・ほとんど達成できず